PLAT CALENDAR

3 March

2［土］―3［日］市民と創造する演劇『リア王―どん底から笑ってリターン！―』◉PLAT主ホール
8［金］―10［日］ええじゃないか とよはし映画祭2019◉PLAT主ホール・アートスペース
12［火］アカペラサークルJ.U.S.T.「J.U.S.T. 20th LIVE」◉PLATアートスペース
13［水］―15［金］豊橋演劇鑑賞会 第271回例会 劇団文化座『三婆』◉PLAT主ホール
13［水］株式会社さんぽう 進学相談会◉PLATアートスペース
16［土］―17［日］PLAT小劇場シリーズ MONO『はなにら』◉PLATアートスペース
17［日］第33回豊橋素人歌舞伎保存会定期公演◉PLAT主ホール
22［金］―24［日］第13回 春季全国高等学校演劇研究大会◉PLAT主ホール
28［木］志多ら全国ツアー「息吹～ IBUKI ～」千秋楽 豊橋公演◉PLAT主ホール
29［金］プラットワンコインコンサート 松本純奈『イタリア音楽の調べ』◉PLATアートスペース
30［土］第21回 豊橋中央高校吹奏楽部 定期演奏会◉PLAT主ホール
31［日］笑いの学校 第9回例会 三遊亭王楽 独演会◉PLATアートスペース

4 April

6［土］『シリーズ恋文vol.8』◉PLAT主ホール
13［土］豊橋音楽連盟 第一回新人演奏会◉PLATアートスペース
14［日］もりたピアノ教室 Primavera Concert◉PLATアートスペース
16［火］―17［水］KAJALLA#4『怪獣たちの宴』◉PLAT主ホール
20［土］―21［日］『母と惑星について、および自転する女たちの記録』◉PLAT主ホール
20［土］魅惑のサウンド グロトリアンピアノコンサート
はちまん正人 ピアノ×マリンバデュオコンサート◉PLATアートスペース
21［日］みんなのたのしいぴあの教室 ピアノ発表会2019◉PLATアートスペース
25［木］大学・短期大学・専門学校 進学ガイダンス◉PLATアートスペース
30［火・祝］プラット2019年度プログラム説明会◉PLATアートスペース

表紙／市民と創造する演劇「リア王―どん底から笑ってリターン！―」
撮影：宮田明里
企画・発行／公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン／味岡伸太郎＋有限会社STAFF
平成31年2月発行 36号［隔月発行］

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2019年3月―4月
vol.36

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

プラットニュース

CONTENTS

表紙 市民と創造する演劇
「リア王―どん底から
笑ってリターン！―」
2
INTERVIEW：1
「リア王―どん底から
笑ってリターン！―」
劇場で一緒に笑いましょう。
橋本昭博、長島 確
4
INTERVIEW：2
MONO「はなにら」
今、旅立ちの時は来たようだ。
土田英生
6
INTERVIEW：3
まちと劇場の技技交換所
オープンエンドの
新・参加型プロジェクト始動！
長島 確
8
INTERVIEW：4
障がいのある人と共に創る演劇の
ワークショップ＆レクチャー
経験してもらうことが一番。
吉野さつき
10
PURA PURA
パラコの寄り道ぶらぶら
桑原裕子
劇場には個性が必要なんだ。
佐藤 信
12
INFORMATION
PLAT主催公演情報
14
FOYER
平成から次の時代へ。
7年目を迎えるプラットの向かう方向とは。
プロデューサー放談。
15
SUPPORT
TICKET CENTER
16
PLAT CALENDAR

底抜けの明るさと個性を持つ豊橋のみんなと創ればそれは悲劇か？まさかの喜劇か？

劇場で一緒に笑いましょう。

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

上演台本・演出 **橋本昭博**、ドラマトゥルク **長島確**

矢作―― 演出家の橋本さんは茨城出身で、いつから演劇をやっていたのですか。

橋本―― 中学一年生の12歳が初舞台です。兄が地元のアマチュア劇団で芝居をやっていて、そこの公演を観に行ったのがきっかけです。その後、高校時代は隣街の水戸芸術館でワークショップを受け、「若いうちに身体のことを知っておけ」と言われて、モダンバレエ、コンテンポラリーを1年。大学では、蜷川幸雄さんに何回かマンツーマンで稽古をつけてもらったり、稽古場に行ったりしました。大学を出てからは、いろんな経験を踏むため、3年ぐらい小劇場を転々、オーディションも受けに行ったし、繋がりがどんどん増えて、月一以上

で舞台に立っていました。劇団を立ち上げるなんて全く思っていなかったのですが、扉座の横内謙介さんに「劇団作れ」と言われ、仲間を集め、「これ、いつかやりたいな」と昔から思っていた谷川俊太郎さんの『入場料八八〇円ドリンクつき』を取り出して、モラパン(Moratorium Pants)を旗揚げしました。

矢作―― 長島さんはドラマトゥルクとしての参加ですが、『リア王』における役割をお聞かせください。

長島―― もう一人一緒に考える人がいると、いろんなことができる。それに尽きると思います。ドラマトゥルクはドラマツルギーの担当者。ドラマツルギーというのは劇作法とか訳されますが、簡単にいってしまうと、いろんな要素が組み合わさって、どんな意味になるのかを扱う技術です。これは劇作家が担う部分でもあるし、上演においては演出家も大きく関わります。とくに今、メディアが発達し、世の中もものすごい情報量と速度になって、それに応答しようと思ったら、一人の頭ではカバーしきれない。そこをフォローするのがドラマトゥルクという仕事だと思っています。

矢作―― 橋本さんは長島さんに対して、どういうことを期待していますか。

橋本―― 本当に今言ってくださった「僕一人じゃなく、寄り添って考えてくれる」という言葉でここまで1年間、僕を支えて、一緒に走ってもらいました。稽古に入るまでというのが一つのターンだと思っていたので、昨日、実際に稽古場に一緒にいれて感慨深かったです。ここまで確さんが一緒にいたから「アリ」のアイデアとともに、この市民が揃って、というところまで来られた。ここから市民と一緒に、社会との繋ぎをどういうバランスで組み立てていくのか迷った時に、また方向を示してもらったり、市民の良さを引き出したりすることに関しても期待しています。

矢作―― どのようなコンセプトで準備を進めているのでしょうか。

橋本―― 悲劇的で、難解な『リア王』を、観る方もやる方も、まずは話がちゃんと伝わり、面白がれる作品にしたい。それに加えて、悲劇を喜劇にできないか、からスタートし、どうこれを演出するかで閃いたのが、「リア」を反転させた「アリ」による『リア王』。アリがシェイクスピアを演じ俯瞰して見ることで、逆に人間が見えてくるのではないか。悲劇だけど、アリも人間も本気で生きているからこその滑稽さが、喜劇に変わらないだろうかというコンセプトでやっています。きっと豊橋の市民と一緒に作れば、小さくて可愛い「アリ」という固定概念から強い個性がはみ出し、生きている生身の人間が出てくるのではないかと思っています。それが楽しみだし、今回のテーマです。

長島――『リア王』を原作にするのは僕の提案です。何か新しいことを考えるためには、結果の予想がつくものでない方がいい。その意味で、『リア王』を市民劇でやるのはいいチャレンジだと思いました。作品を通して、自分たちが生きている社会を考えるためのいろんなフックがありそう。悲劇にどう取り組むかもポイントです。古代ギリシャの悲劇では、優れた人が運命に翻弄されて落ちていく。それを見て、感情移入して、みんなで泣く。それで感情のデトックスをするのが演劇の効用だとされていました。でもシェイクスピアの時代には、権力者が転落していくのは民衆にとって娯楽になった。さらに何百年か経った今、炎上だったり、エンタメ化がますます進んでいる。でもそれでいいのか。何か希望のある形で悲劇のモチーフを反転させることができるときっと面白い。

そして、橋本さんから「アリ」のアイディアが出てきました。ダジャレだけど、面白いことが起こるためには、理屈を超えた一見「くだらない」ジャンプが必要です。アリ

のおかげで、出演者チームのリサーチ報告会で、チャップリンの「人生はクローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇である」という言葉が出た。俳優の洪雄大さんも、人間は自分と同じ人間を見ても、近すぎて人生を考えることはできないが、アリを見ていると、その道行きを眺めながら、人間の人生のことを考えてしまう。人間にとってこんなふうに感じさせてくれる距離感の生き物は、アリしかいないのではないか、と言っています(笑)。

矢作―― 橋本さんは最終的にどういうふうに持っていきたいのでしょうか。

橋本――「何で僕は市民劇の演出をやるのだろう」という疑問に、ずっと答えは出ないままでしたが、昨日のリサーチ報告会を見ていて、プロの俳優にはない味が市民にはありました。もちろん技術はプロには劣るかもしれませんが、プロにも勝るクセの強さと、生きている生活の匂いがありました。それプラス、劇場のこの5年の蓄積も相まって、ちょっとずつ技術もあるメンバーや、多彩な人たちがいるのが強み。市民劇をやる意味の答えは、やはり市民の中にありました。この人たちと一緒に、市民たちの意見や生きている生活の匂いがアリからどんどん飛び出ていって、お客さんもアリの世界に巻き込んでいき、一緒に楽しめるような作品になればいいなと思います。

矢作―― 最後に決意表明みたいなメッセージを。

橋本――『リア王』の中の悲劇を、とっておきの喜劇にして待っていますので、ぜひ劇場に来ていただけたらと思います！　アリと一緒に、人生を笑いましょう！

これまでの稽古

2018年11月23日～25日
出演者ワークショップ
『リア王』に「アリ」要素をどう混ぜてどんな作品にしていきたいか?出演者とグループワークや意見交換を重ねました。

2019年1月5日～14日
第一次稽古
台本が上がり配役も決まって、冒頭からどんどんとシーンを立ち上げていきます。主ホールも使って本番のイメージが見えてきました。

3月2日[土]・3日[日]14:30開演
原作＝W.シェイクスピア
脚本＝樋口ミユ
上演台本・演出＝橋本昭博
ドラマトゥルク＝長島確
振付＝白神ももこ
出演＝オーディションで選ばれた一般市民
会場＝PLAT主ホール

市民と創造する演劇

「リア王―どん底から笑ってリターン！―」

こんなシェイクスピア、あり?

INTERVIEW:1

橋本昭博[はしもと・あきひろ]／俳優・演出家・振付・演劇プロデュースユニットMoratorium Pants主宰。桐朋学園芸術短期大学演劇専攻を経て、横内謙介、森新太郎、深作健太、ペーターゲスナー、扇田拓也など数々の演出家の舞台に出演。2011年演劇プロデュースユニットMoratorium Pantsを旗揚げ、全作品の演出、振付、出演を担う。詩人の谷川俊太郎の作品を上演し対談も行うなど、演劇の新しい可能性を追求している。13年シンガポールとの国際共同制作舞台に出演。14年水戸短編映像祭ベストアクター賞受賞。15年ユース非核特使として世界一周。表現教育指導者として教育現場でも活動を展開。

二十年前の天変地異により、親や子供を失った人たち。
他人であったはずの彼らは寄り添うように家族になった。

今、旅立ちの時は来たようだ。

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

作・演出 土田英生

3月16日[土]・17日[日]14:30開演
作・演出＝土田英生
出演＝水沼健、奥村泰彦、尾方宣久、金替康博、土田英生ほか
会場＝PLATアートスペース

PLAT小劇場シリーズ
MONO

「はなにら」

《別れ》はいろんな顔でやってくる

INTERVIEW：2

土田英生[つちだ・ひでお]／劇作家・演出家。MONO代表。1967年3月26日 生。愛知県出身。1989年に「B級プラクティス」(現MONO)結成。1990年以降全作品の作・演出を担当する。1999年『その鉄塔に男たちはいるという』で第6回OMS戯曲賞大賞を受賞。2001年『崩れた石垣、のぼる鮭たち』(文学座)で第56回芸術祭賞優秀賞を受賞。2003年文化庁の新進芸術家留学制度で一年間ロンドンに留学。近年は劇作と並行してテレビドラマ・映画脚本の執筆も多数。その代表作に、映画『約三十の嘘』、『初夜と蓮根』、テレビドラマ『崖っぷちホテル！』『斉藤さん』シリーズなど。

矢作── 「MONO」の成り立ちからお伺いします。

土田── 愛知県出身で、立命館大学で演劇を始め、三年生で中退し、東京で劇団に入ったのですが挫折して。京都に帰って大学時代のメンバーと作ったのがMONOの前身の「B級プラクティス」です。その後、本格的にやろうと、「MONO」に改名しました。

矢作── 今に繋がる作風は、その当時からですか。

土田── 今、つかこうへいさんの作品を読むと、なんて俺とそっくりなんだろうと思うぐらい影響を受けていましたね。その後、平田オリザさんの作品を観たり、岩松了さんが好きだったり、そんな色々が自分の中で合わさって、94年にやっと今のスタイルが見つかった。静かでもなく、でも騒がず。「中学生が観ても話はわかる。でも、どんな大人が観ても鑑賞に堪えられる」、そういう極端すぎないものをと意識しています。

矢作── 演劇をと思ったきっかけはあったのですか。

土田── 高校演劇も一切やっていなくて、大学で声をかけられて、そのまま何となく。東京から帰って、自分で劇団を立ち上げようということになって、脚本を友達に頼んだんですが結局うまくいかなくて。でも、もう公演日も決まっていてチラシも配ってしまっている。「じゃあ、俺が書くわ」というのが脚本を書き始めたきっかけですね。それを上演した時に、お客さんが笑うということにびっくり。それでさっそくワープロを買いに行った。もともと役者をやりたくて始めたんですが、だんだん自分の中でその要素が減ってきたように思います。

矢作── このメンバーとなら、やっていけるなと思った瞬間はあったのですか。

土田── ないです(笑)。好きなものもみんな違いますし。ただ、嫌いなものや恥ずかしいと思うこと、デリカシーの方向性というか、例えば、目下の人に威張らない、そういう当たり前のベクトルが似ている。それが長続きしている理由かなと思います。ずっとやっている5人は、一番新しい人で20年、一番古い人で30年、ここまでメンバーが変わらない劇団は、あまりないですよね。

矢作── 今回、劇団員を増やそうと思ったのは、何故。

土田── 全員、アラフィフの男5人です。あと数年で辞めるというなら、このままが良いと思ったんですが、この先もやっていくなら若い人が必要だなと4年ほど前に俳優講座を行いました。僕らは古い劇団なので、普通に劇団員募集して、オーディションに合格してという経緯で参加すると、不必要な上下関係しか生まれないんじゃないかと。一緒に作る以上、年齢関係なく共同で作業ができる形を、時間をかけて作ったというイメージです。

矢作── 比較的早い時期から、京都だけではなくツアーというスタイルですね。

土田── 1999年に東京で行われたリージョナルシアターという企画に招いていただいてから、東京でも定期的にやりたいという思いがありました。その後、声をかけてもらって、じゃあ、名古屋も行こうかとかというかたちでしたね。

矢作── 今の演劇の流れをどう感じていますか。

土田── 僕らは会話劇の形ですが、チェルフィッチュの岡田利規さんが出てきたあたりから、明らかにモノローグ演劇が増えてきましたね。みんな秀逸です。ただ、去年くらいからその寄り戻しがきて、また普通の会話劇が増えているように思います。

矢作── 会話の面白さとは。

土田── 僕自身はモノローグに全然興味なくて(笑)。簡単にいうと、引いてみるということですかね。意地悪な見方ですが、僕は会話している二人がズレてる状態が面白い。コントみたいな考え方です。そのズレをいかに拡大して、表現するかということが、面白いなと思ってやっています。

矢作── 『はなにら』に、特別な意味がおありですか。

土田── 花の名前ですが、花言葉が「悲しい別れ」で、星形のかわいい花なのですが、にらの匂いがする。そういう矛盾した存在が好きで、今回の芝居の内容にハマると思った。劇団が30周年ということも含めて、人がずっと一緒にいるのはどういうことなのか。日本は3.11から、絆という言葉がやたら言われる。絆と言われたら、もう逃れられない。決めつけられる人間関係が嫌で、内側から築き上げる人間関係って何だろうと考えていた。だから、疑似家族の話を使って人の結びつきについて考え、最終的に別れていく話なので、『はなにら』というタイトルに繋がっていきました。

メンバーが増えて、世代がバラバラになりました。これを上手に共存させるにはどうしたらいいか。で、疑似家族ですが、津波みたいな天変地異で一気に家族を失った人たちがいる。妻や子供を亡くした大人たちや、親を亡くした小学生たちが、一つの家族になろうとして仮設住宅で暮らす。20年経って仮設住宅から出て行かなきゃいけないという状態になった。小学生だった娘たちも30歳くらいになって、いいかげん出て行けよという感じだけど、血の繋がりがなく作ってきた家族だから、逆にみんな、どう離れていいかわからない。劇団がどのように繋がっているか、ということと絡めて書ければと思っています。

矢作── 設定としては、ちょっと先の未来ぐらいですか。

土田── 尋ねられると、少し先の未来をと言っているのですが、本当のところは毎回現代です。現代のパラレルワールドを書いているつもりですが、リアリティーがないのは嫌だし、と同時に、現代の風俗は出したくない。例えば台詞で、コンビニの名前が出てくるのが許せないとか(笑)。

矢作── 豊橋で上演するにあたって、メッセージを。

土田── 僕は、愛知県出身ですが、地元の人が演劇を観に行くということが、未だに信じられない。安城に親戚とか、蒲郡にも知り合いがいますが、演劇のえの字も聞いたことなくて(笑)。だけど僕はどんな人が見ても楽しめる普通の演劇をやっているつもりなので、普通に笑えて、普通にしんみりというのを、一度観てみていただきたいなと思います。

矢作── ありがとうございます。

まちと劇場の技技交換所

オープンエンドの新・参加型プロジェクト始動！

穂の国とよはし芸術劇場PLATで前代未聞の企画が動き出しました。その名も「まちと劇場の技技交換所」は、劇場で定着している技術と市民生活の中に根づく技術を共通テーマのもとに集め、極意やコツを教え合うものです。劇場には客席から見えないところに、まちには意識しないと見逃してしまうところに、無数の技が隠れています。それらを照らし合わせたら何が起きるでしょうか。そこで本誌ではディレクターの長島確に取材。豊富な経験と見識から打ち出す、新時代の参加型プロジェクトについて尋ねました。

INTERVIEW : 3

〈つくる〉ことを開放したい。ヒントやノウハウを収集・共有して、

長島 確 ディレクター

撮影：穂の国とよはし芸術劇場

――― 企画の経緯を教えてください。

長島―― 最初はプラットの吉川剛史さんから学校開設の相談があったんです。吉川さんは市民劇の担当でもあり、主に俳優の技術習得の場を設けることで市民劇や地元団体の活性化を考えていました。でもそれに対しては、学校を開いても来られる人は限られるし、大きな広がりを持たないだろうと率直にお話しました。また、僕がドラマトゥルクという仕事をしているせいか、日頃から〈教える／習う〉という一方通行には違和感を抱いていたんです。ドラマトゥルクは、より良い作品にするため演出家や振付家と一緒に考える立場ですから。それで、まず考えたのが〈教える／習う〉という関係を互いに交換できる仕組み。もうひとつはカリキュラムの分割を従来とは変えることでした。

――― 具体的には？

長島―― カリキュラムで言えば〈演技〉〈照明〉など分野ごとが一般的ですけど、これを動詞で分けてみたらどうかなと。例えば〈照らす〉とか〈だます〉とか（笑）。関係の交換については、教え合う場を設けて公開し、野次馬的に見物する人まで含めて面白くなればいいと考えました。相談を受けた頃、ランシエールというフランスの哲学者の本に没頭していて、〈分割と分配〉をあらためてどうするか、やたら一生懸命考えていたんですよ（笑）。それで技術の交換と共有というアイデアにたどり着きました。

――― 技術の共有方法としてウェブサイトがひとつの軸になっていくんですよね？

長島―― さいたまトリエンナーレ2016でプロジェクトをやったとき実感したんですが、劇場に来たくても来られない人がたくさん存在するんですよ。劇場文化は、良くも悪くも同じ場所・同じ時間に集まることを要求しますが、そこに来られない人たちもいて、でもこちらから出かけていけば会える。劇場は、扉を開いて待っているだけではダメで、広がりを持ちたければ、来なくても何かを体験できる仕組みが必要です。だったら、まずはこちらから出向こう、と。その際、もはやパフォーミングアーツでなくてもいいのかもしれない、見せに行くのではなくむしろ教わりに行ったっていいんじゃないか？そんな気持ちが高まった結果、物々交換のように技と技を交換できる場を作り、ウェブサイトをそのための扉にしようと考えたんです。そうすることで豊橋以外、さらには海外にも届く可能性があり、技技交換所に関わっていく人も広がるかもしれませんからね。

――― だから、劇場内外を問わず多様な技術を取り上げるんですね。

長島―― よく「劇場は世界を映す鏡」と言いますが、双方を支える技術も合わせ鏡のようにして出会わせたら面白いと思ったんです。今、劇場のプロ、まちのプロの技術を集め始めていて、すでに神社や花屋さん、呉服屋さんで〈結ぶ〉〈したためる〉〈たたむ〉の技を撮影しました。サイトの本格運用は2年後ですが、途中経過も含め公開しながら賛同してくれる人を広げていきたい。サイトを通じて何をやろうとしているのか形になって見えれば、まちへ出て「技を見せてください！」と言いやすいですしね（笑）。

――― 1月にはイベントを通じてプロジェクトが正式発表されました。

長島―― 技技交換所を知ってもらえたら、次は「盗んで、使ってください」と言いたいですね。見るだけでもきっと面白いですけど、技のプールとしてそこから持ち出してもらってもいいんです。どれをどう活かすかは、皆さん次第。技術は応用が大事で、思いがけない使い途が見つかった方が面白い予感がしています。例えば〈照らす〉技術で犬小屋をライトアップする人とか、〈たたむ〉技術でクレープをたたむ人がいてもいい（笑）。実例が出れば出るほど、面白い技もアイデアも集まってくるはず。ひとつひとつの使いかた自体が発明だし、創造だと思います。

――― 劇場の使命も踏まえ、これからの展望をお聞かせください。

長島―― 今はつくることの面白さを開放していく時代だと思っています。創作や表現の特権化はやめて、観客も消費者に終わらずつくる側にまわって楽しんだらいい。そのために技技交換所がヒントやノウハウを収集・共有して、〈つくる〉ことが開放されるよう目指します。また、参加型事業は今後、オープンエンドかどうかも重要なポイントになる。あらかじめ最終形・最終地点が決まっているのではなく、誰もがプロセスやエンディングに影響を与えられる可能性があったほうが楽しいですよね。劇場には政治や経済とは別のレイヤーでできることがありますし、それを支えている技術がある。そもそも熟練の技って見ていて面白いじゃないですか？まちにもスゴイ人はたくさんいて、その技を知りたいし見たい。僕自身、がんがん「交換しましょう！」という気持ちでいっぱいです。　取材・文　小島祐未子（編集者・ライター）

長島確［ながしま・かく］／日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、さまざまな演出家や振付家の作品に参加。近年は劇場の発想やノウハウをまちに持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に関わる。最近参加した劇場作品に『DOUBLE TOMORROW』（ファビアン・プリオヴィル演出、演劇集団円）、『マザー・マザー・マザー』（中野成樹＋フランケンズ、「CIRCULATION KYOTO」）、『リア王－どん底から笑ってリターン！－』（橋本昭博演出、PLAT「市民と創造する演劇」）など。主な劇場外でのプロジェクトに「アトレウス家」シリーズ、「つくりかた研究所」（共に東京アートポイント計画）、「ザ・ワールド」（大橋可也&ダンサーズ）、「←（やじるし）」（さいたまトリエンナーレ2016）など。東京藝術大学音楽環境創造科特別招聘教授。2018年度よりフェスティバル/トーキョー ディレクター。

Photo：Kazue Kawase

障がいのある人と共に創る演劇のワークショップ&レクチャー

踏み出してしまえば、そんなに難しいことではない。私も最初はそうだった。

経験してもらうことが一番。吉野さつき コーディネーター

INTERVIEW：4

PLATでは、昨年10月に障がいがある俳優・演出家による英国の劇団「グレイアイ・シアター・カンパニー」の芸術監督ジェニー・シーレイさんをお招きしました。ジェニーさんは聴覚・視覚障がい者へのコミュニケーション手段である手話や音声解説を、芸術表現の手段として作品の中に融合させた手法を取り入れた活動で高い評価を得ています。聞こえない、見えない、身体の動きに制限がある人などがいることを前提とした演劇ワークショップと、自身のろう者としての経験とその芸術活動をテーマとしたレクチャーをコーディネートした吉野さつきさんにお聞きました。

聞き手 吉川剛史 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部

吉川── 吉野さんとジェニーさんとの関係を教えてください。

吉野── エイブル・アート・ジャパンというNPOが明治安田生命と行った「エイブルアート・オンステージ」の国際交流企画で、ジェニーが演出した作品やワークショップにコーディネーターとして関わりました。『R&J（ロミオとジュリエット）』という作品を、2011年に彩の国さいたま芸術劇場でやったあと、私は豊橋に引っ越しました。その後2020年を見据えたシンポジウムで文化庁がジェニーを招聘し、British Council（ブリティッシュ・カウンシル）も間にたって、久しぶりに来日することになったのです。

しかし、このままだと東京近郊の人たちだけがジェニーに出会って終わってしまう。そんなもったいないことはない。愛知大学の学生たちや、PLATのワークショップファシリテーター養成講座や、東三河周辺で障がいがあり舞台芸術にも関心がある人たちにジェニーを紹介したいと思い、2016年に大学でワークショップ、PLATでレクチャーをしました。その時、次は豊橋の人たちに、話を聞くだけでなく演出家としてのジェニーに出会ってほしいと思ったのです。

吉川── 今回コーディネートする上で、気を付けた点などがあれば教えてください。

吉野── まず豊橋がどういう地域なのか、どんな人たちが参加しそうなのか、劇場がオープンしてまだ6年目ということ。それから、東京オリンピック、パラリンピックで、東京とその周辺は障がいのある人のアートについてメディアでの露出も増え活発に動きがあるが、豊橋は未だそういう状況ではない。だが、PLATがこの5、6年の間やってきたワークショップファシリテーター養成講座や、市民と創造する演劇、高校生と創る演劇などの成果がかなり見えてきている。その成果がより大きく育つようなイメージを持ってやりたいと事前にジェニーに伝えました。

吉川── 吉野さんには情報発信の部分でも伝わりやすくする考え方も、コーディネートしていただきました。

吉野── 劇場が自分たちにとって開かれている場所だという認識が、まだ多くの障がいのある人に持たれていないと思います。だからこそ、ハッキリ、わかりやすく、劇場がそうした人たちの方を向いていることが伝わるような情報発信が必要です。

今回は「エイブルアート・オンステージ」などで学んだことを応用して、チラシの作り方とか、文言とか情報発信について、出来る限りのアドバイスをさせていただきました。劇場にとって初めての事でしたが、もうちょっと早くそうした広報や広報内容の点字翻訳サービスを利用するなどできるとよかったですね。

吉川── そうですね。いろいろやること、やれることはあったなと思います。

吉野── 障がいのある人が舞台にあがることはもちろん、鑑賞支援でさえ二の足を踏んでしまうというか、ほんとにこれでいいのか、どこまでやったらいいのだろうというような不安の声を、まだまだいろいろなところで聞きます。それが先にたって、なかなか一歩が踏み出せない。踏み出してしまえば、そんなに難しいことではないのですがそれは経験しないとわからない。私も最初はそうでした。

例えば、発語がはっきりしない脳性麻痺の人に、何度も繰り返し聞いたら悪いなと思うから、聞き取れたふりをしてしまう。ある日、ご本人に聞いたら、「いや、何十回でもいいから、本当にわかるまで聞き返して。わかったふりをされる方が嫌だから」と言われた。手話ができなくても筆談すればいいし、唇の動きを読んでくれる人もいる、協力し合えば何とかなる。経験してもらうことが一番。

吉川── 実際に3日間やってみて、どうでしたか。

吉野── もうちょっといろいろな人に参加してほしかった、というのは正直あるけれど、この先につながる可能性もあると思ったし、今までこの劇場に来ていなかった人も来てくれた。ネットワークがこれから作られるのではないでしょうか。

あと、障がいのある人だけでなく、それぞれのバックグラウンドも、身体的な特徴も違う人たちが、シェイクスピアの『テンペスト』を題材に、人間関係がギュっと凝縮された「ドラマ」をどう表現するかを見つけ出していく過程が、クリエイティブなことでした。私達が生きている中で起きる関りと、関わりの中で起きる軋轢とか、衝突とか、お互いを愛しいなと思う気持ちが「ドラマ」を生む。そうしたことが何層にも重なった演劇を、ワークショップの間ずっと見ていたと思います。

『テンペスト』を通して、異なる属性にあるさまざまな登場人物やその関係を、自然と今の私たち、豊橋の中と外の多様な人たちに置き換えて考えさせられた。3日間でそれだけの経験をしたのだと思うと、やはりジェニーはすごい。

吉川── ジェニーさんは、『テンペスト』というものをベースに、関係を体験させていくという流れやアイディアの出し方がすごい。久々にクリエイティブな現場に入ったという実感のあった3日間でした。ありがとうございました。

吉野さつき［よしの・さつき］／愛知大学文学部メディア芸術専攻教授・ワークショップコーディネーター。シティ大学大学院（英国）芸術政策経営学部修士課程修了後、公共ホールの文化事業担当を経て、平成13年度文化庁派遣芸術家在外研修員として、英国で演劇のアウトリーチやエデュケーションプログラムの研修と調査を実施。教育、福祉、ビジネスなどの現場でさまざまなジャンルのアーティストによるワークショップをコーディネートする他、各地の公共ホールや大学などで、アウトリーチ事業やワークショップの企画運営を担う人材育成プログラムにも数多く携わる。文化経済学会〈日本〉会員。

劇場には個性が必要なんだ。

座・高円寺 芸術監督
佐藤 信
穂の国とよはし芸術劇場PLAT
芸術文化アドバイザー
桑原裕子

PURA PURA
バラコの
寄り道
ぷらぷら

桑原―― 世田谷パブリックシアターと、座・高円寺と東京二ヶ所の公共劇場の芸術監督をされていて、そこで求められることに違いはありましたか。

佐藤―― 劇場として求められていることは違ったかもしれない。日本には、本来の意味で劇場はない。公の施設は地方自治法で決められ、条例には貸館料金しかたぶん書いてない。それを劇場にしようとすると、いろいろ工夫がいる。世田谷パブリックシアターの場合には公共劇場や公共ホールを劇場にすることが大きい目的だった。同時期に新国立劇場ができた。それで、それとは違う劇場をつくらなきゃいけないと思った。ナショナルシアター以外の自治体がつくる劇場の個性は何が違うのだろうと、ある意味では非常に構想はたてやすかった。新国立劇場でできないことをやればいいわけだから。芸術監督がなぜ必要かというと劇場に個性をつけるためなのです。芸術監督という制度が生まれたのは、劇場が個性を持つとしたらこれだということは、多数決にそぐわない。だから、それを一人に任せようという考え方なんです。

ヨーロッパの場合は、住民からの目がすごく厳しい。芸術監督がダメだと思ったらガンガンやって、変えられちゃう。結果を出してかなきゃいけない。日本の芸術監督制度は、まだシステムとして、成り立ってない。解任するシステムが全然ないからね。で、パブリックシアターの構想で一番大きいことは、ワークショップを事業の中へ本格的に組み込み、予算の3分の1をそこへ使うという縛りを作ったことかな。芸術監督の仕事は、やはりそういうところにあると思う。

高円寺の場合は、ミッションとして地域と密着した劇場のプロットタイプを作ろうとした。どうやったら予算を膨らまさないで劇場運営できるか。スタッフの数を増やさないためにはどうしたらいいか。だから、作品もここの場合はレパートリーとして一回作ったら、少なくとも5年間は使うと決めたとか。それから、子供のための自主事業に一番お金を使おうと。杉並区が演劇専門劇場を建てたいと劇作家協会に相談して、じゃあ誰を送り込もうかってことになったとき、僕は協会の会員じゃないけど、別役実さんが「劇場だったら信に相談したらいい」と言うので、立ち上がる3年前、まだ何も決まってない段階から立ち上げのお手伝いをして、そのまま芸術監督になった。ここを運営するということは一つの作品作りだと思っている。ここで僕がやっていることは、壁にものを貼らせないこと。それから、区のお知らせは全部下に集めている。差し入れの花もロビーには置かないようにしている。花は、お客さん全体とは全く関係がない。それに、面倒みるのが大変なんだよ。それから、チラシが座席に置いてあることや、上演前に前説があるのが嫌なんだ。「携帯切れ」と言われるのが、すごく嫌なんだよ。モラルに関することは、個人個人が判断することだから。

佐藤信［さとう・まこと］／劇作家、演出家。昭和41（1966）年に劇団「自由劇場」を設立。昭和43年（1968）年に「演劇センター 68」（現在、劇団黒テント）の結成に加わり、以後20年間、大型テントでの全国移動公演を継続。1980年代より東南アジアを中心に海外の現代演劇との交流を深める。劇団を中心にした演劇活動のほかに、オペラ、舞踊、結城座の糸操り人形芝居、ショーやレビューと、さまざまな分野の舞台作りに参加。世田谷パブリックシアターの劇場監督（1997～2002年）。現 在、個人劇団「鴎座」を主宰するとともに、2017年6月、横浜の下町に、小劇場、スタジオ、宿泊施設が一体となったアートセンター、若葉町ウォーフを個人で開場。

桑原―― ほかにも、監督として劇場を手掛けられる上で「僕の個性はこうだ」みたいなものは、何かあったのですか。

佐藤―― 演出家の表現手段は多様だから、どこで演出家としての役割を果たすかというのは演出家によって違うと思う。だから、すべての芸術監督がチラシのことを考えなくてはいけないとは思わない。それぞれその施設で何の仕事をするのかは、すごく違う。でも、それによって劇場に色がつくことは必要なんだ。劇場って地場産業だから。地産地消なんだよ。日本は今、地産地消になってないけど、だんだんそうなってくと思う。すると、個性が大事になってくる。つまり、全国発信するみかんを作るではなく、地域の人がおいしいと思うみかんとは何だろうと考えることだと思う。それは、おいしいとは何かということに対して個性を作らなければ無理。だから芸術監督がいる。

桑原―― 現在の佐藤さんにとって、芸術監督として一番のメインの仕事はどんなことでしょう。

佐藤―― 編集みたいなこと。やはり10年経つと、スタッフが立てる企画が中心になってくる。それを外へ打ち出す時、個性化するために、それをきちっと組み立てなければならない。座・高円寺は小さな劇場だけど、公共劇場にしては珍しく常打ち的にレパートリーがある。それを並べて、今年はこういう方向でいくということを、いろんなかたちで説明する。それが一番大きい仕事。

桑原―― 座・高円寺の演劇人の教育というか、俳優たちの育成は、芸術監督として取り入れたことですか。

佐藤―― 芸術監督の話があった時に、アカデミーをやらせてもらえればということはあった。教育とか育成とはちょっと考え方が違う。まず、劇場に人がいない時間を作りたくない。一番いない午前中から午後にかけて学校をやると、必ず出入りする人がいる。部屋が空いている時も作りたくない。空いているとこがいっぱいあるから、空いているとこを点々として授業をやっている。さっき言ったように地産地消だから、どういうかたちでもいいから、そこで人を育てることが公共施設の役割の一つだと思う。民間じゃ絶対にできないから。この学校が続いているのは、公共でお金が保障されているから。アカデミーを作ろうとした時、演劇の専門家を育てるのではなくてもいい、ここを出て企業に行くでも、演劇のことをよく知っている人をつくればいいと思った。

桑原―― すごく素敵な話をほんとうにありがとうございます。個性を出す仕事だよと教えていただいたのに、すぐ真似したくなってしまうような素晴しいお話でした。

INFORMATION

PLAT主催公演情報

託児サービス対象公演
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

マイセレクト4 対象公演
2019年度も発売決定。詳細は決まり次第、劇場ホームページなどで告知いたします。

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター
◉劇場窓口・電話0532-39-3090［休館日を除く10:00－19:00］
◉オンラインhttp://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］

U24・高校生以下割引ご案内 ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
◉料金＝U24［24歳以下対象］：公演ごとに指定する席種の半額／高校生以下：一律1,000円
◉購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
◉その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

プラット2019年度プログラム説明会

とよはしアートフェスティバル2019 大道芸inとよはし
ボランティアスタッフ募集

「かもめ」

朝海ひかる　須賀貴匡　岡本あずさ　渡邊りょう

ブランデンブルグ国立管弦楽団フランクフルト

春風亭小朝 独演会

プラットワンコインコンサート

松本純奈（オーボエ）

3/2［土］・3［日］14:30開演　**好評発売中**
市民と創造する演劇
「リア王－とん底から笑ってリターン！－」
3月2日のみ
●原作＝W.シェイクスピア●脚本＝樋口ミユ●上演台本・演出＝橋本昭博●ドラマトゥルク＝長島確●振付＝白神ももこ●出演＝オーディションで選ばれた一般市民●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般2,000円ほか

3/16［土］・17［日］14:30開演　**好評発売中**
PLAT小劇場シリーズ
MONO
「はなにら」
2018マイセレクト4
●作・演出＝土田英生●出演＝水沼健、奥村泰彦、尾方宣久、金替康博、土田英生ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席指定］一般3,000円ほか

4/16［火］19:00開演・**17［水］**14:00開演
KAJALLA#4「怪獣たちの宴」
●作・演出＝小林賢太郎●出演＝なだぎ武、竹井亮介、小林健一、加藤啓、辻本耕志、小林賢太郎●会場＝PLAT主ホール●チケットについてはお問い合わせください。

4/20［土］17:00開演・**21［日］**13:00開演　**好評発売中**
「母と惑星について、および自転する女たちの記録」
第20回鶴屋南北戯曲賞受賞作品！蓬莱竜太の戯曲と栗山民也の演出により立ち上がる、女性4人をめぐる“命”の物語、待望の再演。●作＝蓬莱竜太●演出＝栗山民也●出演＝芳根京子、鈴木杏、田畑智子、キムラ緑子●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］7,500円ほか

4/30［火・祝］14:00開演
プラット2019年度プログラム説明会
2019年度、PLATがお贈りする主催・共催プログラムをご紹介いたします。●会場＝PLATアートスペース●料金＝無料（要整理券）※整理券はプラットチケットセンターで3/1より配布予定

5/4［土・祝］・5［日・祝］
とよはしアートフェスティバル2019
大道芸inとよはし
ゴールデンウィークは豊橋に大道芸がやってくる！世界で活躍する大道芸人たちが市内各所を劇場に大変身させます。●会場＝PLAT、豊橋駅南口駅前広場、広小路通りほか●料金＝無料
【ボランティアスタッフ大募集】
『大道芸inとよはし』を一緒に盛り上げてくれる仲間を募集します！●日程＝5月4日（土）・5日（日）●業務時間＝10:00 ～ 18:00を予定●参加条件＝18歳以上で事前説明会に参加できる方●事前説明会＝4月12日（金）・13日（土）●会場＝PLAT創造活動室B●定員＝40名程度（先着順）●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより

5/9［木］18:30開演
「かもめ」
6週間にも及ぶオーディションを経て決定した13人の俳優たちと、鈴木裕美演出による『かもめ』をお贈りします。●会員先行＝2月9日（土）●一般発売＝2月23日（土）●作＝アントン・チェーホフ●翻訳＝小川絵梨子●演出＝鈴木裕美●出演＝朝海ひかる、須賀貴匡、岡本あずさ、渡邊りょう ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席5,000円、A席3,000円ほか

5/24［金］19:00開演　ライフポートとよはし
ブランデンブルグ国立管弦楽団フランクフルト 2019 豊橋公演
好評発売中
浮ヶ谷孝夫指揮、東三河出身の辻田薫りをソリストに迎えてのドイツ・ブランデンブルグ拠点の国立管弦楽団によるコンサート。●指揮＝浮ヶ谷孝夫●ヴァイオリン＝辻田薫り●管弦楽＝ブランデンブルグ国立管弦楽団フランクフルト●曲目＝ベートーヴェン「交響曲第3番英雄」、チャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」ニ長調ほか●会場＝ライフポートとよはしコンサートホール●料金＝［全席指定］S席一般5,000円、A席一般3,000円ほか

6/1［土］・2［日］13:00開演　6月1日のみ
2019マイセレクト4
「CITY」
現代の都市を舞台にした男たちの物語。妹の事故死の真相を追う兄を主人公に、“ヒーロー”をモチーフに描かれる、善と悪の相克――。●会員先行＝3月9日（土）●一般発売＝3月23日（土）●作・演出＝藤田貴大●出演＝柳楽優弥、井之脇海、宮沢氷魚、青柳いづみ ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席5,500円、A席3,000円ほか※発売日初日は、お一人様1申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

MONO「はなにら」

6/22［土］13:30開演
「春風亭小朝 独演会」
ドラマ出演や音楽界とのコラボ、プロデュースなど幅広い分野でその才気を発揮している小朝師匠が今年もプラットに登場！●会員先行＝3月23日（土）●一般発売＝4月6日（土）●出演＝春風亭小朝●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般3,500円、ユース（24歳以下）2,500円

7/7［日］17:00開演
世界最速ジプシープラス！
「ファンファーレ・チョカリーア」
2019マイセレクト4
現在のジプシー音楽を代表し、絶大な人気を誇る、世界最速最強のジプシー・プラス・バンドがPLATに登場！映画『アンダーグラウンド』（1995年カンヌ映画祭グランプリ）や『黒猫・白猫』で注目された、一度聴いたら忘れられない強烈な個性～疾走感・壮快感に満ちている彼らの音楽をお届けいたします。●会員先行＝4月6日（土）●一般発売＝4月20日（土）●出演＝ファンファーレ・チョカリーア●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般4,000円、ユース（24歳以下）2,000円ほか

7/18［木］14:00開演／18:30開演　14:00のみ
野村万作・野村萬斎 狂言公演2019
人間国宝・野村万作と現代劇や映画など幅広く活躍する野村萬斎が率いる「万作の会」による狂言公演。新作狂言「鮎」ほかを上演いたします。●会員先行＝4月13日（土）●一般発売＝4月20日（土）●出演＝野村万作、野村萬斎ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席7,000円、A席6,000円、B席4,000円ほか※発売日初日は、お一人様1申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

7/27［土］昼夜2回公演　昼のみ
2019年度（公社）全国公立文化施設協会 主催 東コース
「松竹大歌舞伎」
松本幸四郎改め二代目松本白　鸚襲名披露
市川染五郎改め十代目松本幸四郎襲名披露
当日はプラット茶屋の開店や特製弁当の販売など、劇場が丸一日歌舞伎小屋に変身！●会員先行＝4月27日（土）●一般発売＝5月11日（土）●出演＝松本白鸚、松本幸四郎ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席10,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか※発売日初日は、お一人様1申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート
好評発売中
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付］500円
3/29［金］11:30開演
「イタリア音楽の調べ」
松本純奈（オーボエ）

ワークショップ・レクチャー
お出かけ支援講座
「文化施設でのアクセシビリティを考え、実践する」
本講座では視覚・聴覚障がい当事者から、障がいとはどういったことなのか・どのような対応をするとバリアが解消されるかを学び、アクセシビリティの向上を目指します。
＜共通事項＞
●会場＝PLAT創造活動室A●参加費＝レクチャーのみ1,000円／レクチャー＋ワークショップ1,500円●対象＝アクセシビリティの知識の必要性を感じている方、文化施設の職員●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより

4/7［日］
レクチャー 12:00 ～ 14:30 ／ワークショップ 15:30 ～ 18:00
視覚障がい者お迎え編
●講師＝美月めぐみ
●定員＝レクチャー 50名（先着順）、ワークショップ 20名（先着順）

4/21［日］
レクチャー 12:00 ～ 14:30 ／ワークショップ 15:30 ～ 18:00
聴覚障がい者お迎え編
●講師＝廣川麻子
●定員＝レクチャー 50名（先着順）、ワークショップ 20名（先着順）

平成から次の時代へ。
7年目を迎えるプラットの向かう方向とは。

穂の国とよはし芸術劇場PLAT

プロデューサー放談。

中島晴美 シニアプロデューサー
矢作勝義 芸術文化プロデューサー
塩見直子 事業制作部

FOYER 7

中島―― 2019年度プラットは7年目に突入します。開館して6年が経ち、何となく色が出てきたのではないでしょうか。

矢作―― 少しずつですが、実績を重ねることで色は着実に付いてきていると思います。プラットに繰り返し来ていただいているアーティストの方も増えてきました。その一人がマームとジプシーの藤田貴大さんです。6月には藤田さん作・演の新作公演『CITY』で、再びプラットにお越しいただきます。キャスティングも注目で、5年ぶりの舞台出演となる柳楽優弥さんをはじめ、井之脇海さん、宮沢氷魚さんなど話題の俳優が出演します。

塩見―― 東京では既に藤田さんの作品は中劇場規模の劇場でも上演されていますよね。

矢作―― そうですね、横浜の小さな劇場で上演した作品で岸田國士戯曲賞を受賞した時代から考えると、着実に大きな劇場での上演機会が増えています。これまでも東京芸術劇場プレイハウスでいくつか作品を上演していますが、2018年7月の『BOAT』では、大きな空間を演出することに関して、一段階クオリティが上がったと言えると思います。これまでアートスペースで『cocoon』(2015年)や『10th Anniversary Tour』(2017年)などを上演してきましたが、新作では初めて主ホールでの上演になります。彩の国さいたま芸術劇場大ホールでの幕開けとなりますが、大きな空間をどのように演出するのか、期待が膨らみます。

そして、芸術文化アドバイザーでもある桑原裕子さんも、プラットプロデュース作品での作・演出だけでなく、自身の劇団KAKUTAでも2度プラットで上演していただきました。次年度は、まず8月に「KAKUTAとびだす童話『ねこはしる』」を再演します。『ねこはしる』は、工藤直子さんの名作童話を音楽＋朗読というスタイルでKAKUTAが上演を繰り返してきていたのですが、昨年、音楽を全面的に変えてリクリエーションしてミュージカル化したことにより、KAKUTAという劇団および『ねこはしる』という作品の更なる可能性を提示できたものになったと思います。そして2019年は豊橋を皮切りに全国5カ所で公演を行います。1年目は、新しい音楽とミュージシャンとともに作品の骨格を作り、2年目にそれをさらにブラッシュアップして熟成させるということができる可能性が見えてきました。このような状況をプラットという劇場と桑原裕子・KAKUTAというアーティストとが協働して整えられたのは、劇場として光栄なことだと思います。

特に普段の公演ではなかなか一緒にはできない地域の劇場と、プラットから発信する作品で連携できるということに、この作品の持つ力とさらなる可能性を感じました。このような事業を通じて、アーティストと劇場とが連携して一つの作品を時間をかけて創造し、それを全国に発信していくというモデルケースを確立していきたいと考えています。

塩見―― 劇場が劇団と協働して作品づくりの幅を広げていくというのは、すてきな形だなと思います。

中島――『ねこはしる』のように親が子どもに見せたいと感じ、自分も見たいという作品を豊橋から発信できることになりますよね。前・芸術文化アドバイザーの平田満さんとは違った意味での芝居作り、観客作りに繋がっていると感じます。

塩見―― 演出家を芸術文化アドバイザーとしてお迎えしたことによる変化ですよね。

矢作―― また、桑原さんとは12月に平田満さんをはじめ、オリジナルキャストでプラットプロデュース『荒れ野』を豊橋と東京で再演します。こちらも是非ご期待ください。

中島―― 古典作品で新作狂言や、歌舞伎、そして文楽も上演します。豊橋ではご自身で歌舞伎や文楽の活動をしておられる方もおられますし、その市民活動の激励にもつながって、プラットが「市民のための劇場の役割」を担いつつ、プロとして研鑽している方の姿を見ていただく機会になるのかなという気がしています。

塩見―― 音楽事業で継続的に実施している「プラットワンコインコンサート」は、年々来場者数も増え、特にシニア層のお客様に多数ご来場いただいています。

矢作―― ワンコインという気軽さだけでなく、劇場の周辺に平日の昼間に気軽に楽しみが得られるような機会はないかと思っていた方々が一定数存在していて、実際に足を運んでくださっているというあかしなのだと思います。平日の昼間に行うイベントとしてある程度は認知されてきましたが、劇場としてはまだまだ考えるべきことがあり、掘り起こすことができるニーズがあると思います。同時に、豊橋で自ら何かイベントをしたいと考えている人たちにも「このようなやり方はいかがですか?」と提案できる実証例になると思います。

中島―― 現在出演している方々からは、自分たちで編曲したり何かチャレンジをしたいという声もあります。それでしたら、自分たちのやりたい事を劇場に提案していただき、一緒に考えていきましょうという話をしています。

出演者も、これまでは劇場からの提案を受けてから考えるという受け身の状況から、どのような演奏家をめざし、そのためにどのようなコンサートを企画するのかを自ら考え、劇場側に提案するように変わってきていると思います。

塩見―― 最後にプロデューサーのお二人から、プラットのこれからについて聞かせてください。

中島―― 開館当初より「広く」というのが使命だったと思います。東三河にどのように広く知られていくかということが。

そして、質も高めることだと感じています。質を極めるときに「上質」という言葉よりは「より深く思索する」、とういう思いで取り組んでいけば、演奏者や、舞台に立つ人自らがそういうふうに考えなければいけない、と思い始めてきているように感じます。観客と一緒に深く考える劇場として門戸を開けたいです。

矢作―― 実はこれまでもそうだったのかもしれませんが、様々な人のための入り口、つまり新しい価値観との出会いの場、新しい人と物との交流の場を作るのがプラットという劇場の役割なのではないでしょうか。それは、観客や参加者として劇場にお越しいただく市民の皆様だけでなく、様々な形で劇場に関わっていただくアーティストに対しても同じなのではないでしょうか。

まさしく、劇場法の前文に書かれている劇場とは「新しい広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能を果たすとともに、国内だけでなく国際文化交流を進め、国際社会の発展のための「世界への窓」としての役割を果たすことがプラットの役割なのだと思います。

SUPPORT 5

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

有限会社 魚伊
電話52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役　竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代)Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

Gallery48 呉服町48 TEL.54-4848

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 豊橋 竹内産婦人科 検索Q

ケンチク クロノ
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町 160-9　障害年金専門社会保険労務士　竹下英司

看板広告　アラキスタヂオ
豊橋市上伝馬町16　電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

医療法人慈豊会
大島整形外科クリニック 院長 大島 毅
東田町井原39の7(市電赤岩口終点前) 電話62-5511(代)

なければつくる
ONOCOM 株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・消化器科・呼吸器科
伊藤医院 伊藤之一 伊藤文二
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間 日本料理 きく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行　みずほ銀行　静岡銀行　名古屋銀行
三井住友銀行　三井住友信託銀行　清水銀行　第三銀行
十六銀行　愛知銀行　中京銀行　大垣共立銀行

創業江戸 御茶席菓子専門店
御菓子司 若松園

気まぐれコンサート
事務局／0532-62-9259(小川恵司)

安心・安全な地下駐車場
パーク500 ソノの親子の看板が目印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌　院長 塩之谷 香　副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54 電話0532-25-2115(代)

豊橋名産 ちくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間　月・火・木・金 10:00～13:00 16:00～19:00
土 10:00～14:00　休診日＝水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久　豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店 高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本の豊川堂
本店・カルミア店・アピタ向山店・プリオ豊川店
セントファーレ田原店・ささしまグローバルゲート店

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

JEANS SHOP YAMATO
豊橋 つつじが丘 ／ 豊川 千歳通り

生活にファインクオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER 7

チケットの購入・お問合せ

プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090[休館日を除く10:00－19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp[24時間受付・要事前登録]

プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、
若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下:一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810[代表]
開館＝9:00－22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT